

第5回第九期中海自然再生協議会

日時：2025年3月22日（土）13：30～16：00

場所：認定NPO法人自然再生センター・フリースペース

協議事項

- ・海藻の回収及びその利用事業の今年度の成果について（倉田）

第3期事業計画の以下の部分に関係する内容として、島根大学生物資源科学部環境共生科学科・生態環境学コースの田中愛梨さんの卒業研究「島根県中海沿岸の海藻藻場における物質循環に関する研究」の発表資料に基づいて報告します。

（2）藻刈りの実施手法の検討

生態系サービス [生息場所]

（現存量の変化）

中海沿岸における海藻類の現存量の変化に寄与する要因として、例えば、生活史特性によるものと環境要因の変化によるものが考えられる。海藻類の生長や繁殖といった生活史の側面に加えて、①被食による現存量の減少、②波浪等による流出と漂流、③枯死後の堆積と分解、といったバイオマスの変化に関する様々な現象がある。中海の沿岸に生育する一次生産者である海藻類の役割を評価するため、これらの現象を記述するパラメータを収集する必要がある。ケージやリターバッグ等を用いた野外操作実験（図5）により、①～③の項目を評価する。

【モニタリングの方法】

本項では、人間の働きかけによって自然環境（生態系）がどのように変化したかを追跡調査する必要性を述べるものであることから、（2）藻刈りの実施手法の検討に係るモニタリング方法（調査研究方法）を以下に記載する。

（現存量の変化）

中海の沿岸の3地点（図6）で海藻類の現存量の変化を記録する。月1回の頻度で30 cm * 30 cmのサーバネットまたは0.05 m²の採泥器を用いて海藻類を採集し、湿重量を測定する。手角地点でケージもしくはリターバッグを用いた野外操作実験を行い、現存量の変化に及ぼす流出と堆積の要因を明らかにする。実験室で小型甲殻類による海藻類の摂食実験を行い、海藻類の被食による現存量の変化を推定する。
